

# ADHD と起業家

江島 由裕・藤野 義和・伊藤 博之

大阪経済大学教授 信州大学准教授 大阪経済大学教授

受稿日：2022年6月29日

受理日：2023年5月25日

キーワード ADHD, 起業家, 解放アントレプレナリング, 幸福感, 自己の統治の実践

## I はじめに

起業家は異端者 (marverick) やトラブルメーカーとなる傾向が指摘されてきた (Berlin, 2017)。イノベーションは辺境より生じると主張される (加護野, 1988)。スティーブ・ジョブズやイーロン・マスクなどの現代の代表的起業家たちに対し、社会への適合性や協調性の欠如の指摘が付きまとう。これらの論点は、いずれも起業家であることが、既成の社会秩序との不適合の可能性を孕んでいることを示唆する。創造的破壊を課題とする起業家にとって、社会との不適合性はその存在の本質に関わる属性なのかもしれない。

本稿は、以上のような問題意識をもって、注意欠如・多動性障害 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder : ADHD) の症状を起業という文脈から捉えて分析を試みている。ビジネス誌だけでなく精神医学の専門家からも、スティーブ・ジョブズやイーロン・マスクに対し、ADHD の症状と関連づけられるような行動が、彼らの起業家活動を特徴づけていることが指摘されている (岩波, 2021)。ADHD に苦しむ人々も社会との適合性の点で問題を抱えるが、それが彼らの起業家活動にどのような影響を与えるのかを考察することで、上記のような起業家の属性の意義を探ることを目指したい。

江島・藤野 (2019) によると、ADHD の症状を有するとされる起業家 (以下、ADHD 起業家) 研究のアプローチは 1970 年代に遡り、当初の精神分析学の視点から、2000 年代には認知心理学の視点へ、そして近年では起業家個人の資質論として、欧米諸国を中心に研究が活発化することになった。ADHD 起業家の研究は、「起業家とはどのような人物か」という問いを掲げる一般的な起業家研究の伝統的な資質アプローチの議論を再評価し、起業行動プロセスのダイナミズムやメカニズムの議論を深耕してきたと捉えられる。

一方、本稿は、13 名の ADHD 起業家の調査・分析に依拠して、資質論を超えることを目指す

探索的研究である。「解放アントレプレナリング (Emancipatory Entrepreneurship : EE)」という理論的枠組みを用いて、ADHD の特性を有する人々が起業家となるか否を分かつものは、資質そのものよりも、彼らが世界に対峙するときに、多様な資質をどのように統御し、自らの生を営もうとするのかという「生き方」の問題、あるいは、「自己の統治の実践」(Foucault, 1986)として捉えて検討を加えている<sup>1)</sup>。社会との不適合を経験する ADHD 起業家は、起業家としての生き方を自らが選び取ることで、自己の人生やそれを取り巻く世界を能動的に創出していた。本研究では、こうした視点から、ADHD 起業家を起業家の一類型として捉え、一般的な起業家論に対する学術的インプリケーションの導出も試みた。「ADHD であること」と「起業家であること」の関連性が明確になれば、ADHD という新しい視座から起業家一般を捉え直す可能性も拓けるという点に意義を見出している。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第Ⅱ節では、本稿の議論を開始するにあたって、ADHD について精神医学的概要および ADHD 起業家研究での概念化の特徴、本稿の同概念の位置づけを提示する。第Ⅲ節では、これまでの ADHD 起業家研究を批判的に検討し、理論的枠組みとリサーチクエスチョンを提示する。第Ⅳ節では、調査方法と調査対象について説明する。次いで、第Ⅴ節では、ADHD 起業家の独自の調査に基づいて、リサーチクエスチョンに関する発見事実を整理し、そのうえで第Ⅵ節で、ADHD と起業家との関係性について、自己の統治の実践の観点から解釈し、さらに、その解釈が導く起業家一般の理解に関する学術的インプリケーションを提示する。最後に、第Ⅶ節で、本研究の結論をまとめたうえで、今後の課題を整理する。

## Ⅱ ADHD とは

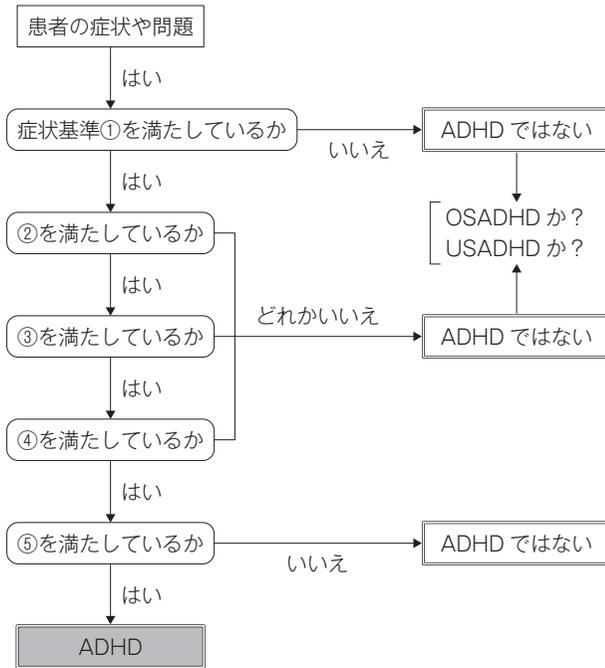
ADHD は、精神医学の領域でも、複雑で多様な類型の症状から構成される、取り扱いの難しい概念である。本稿は、ADHD の病理に踏み込む研究ではないが、ADHD と起業家の関係性はジャーナリスティックな印象論で議論されることが多いのも事実であり、最初に ADHD とは何かを確認しておくこととしたい。

わが国の精神科医が日常的に使用している診断基準は、米国精神医学会 (American Psychiatric Association : APA) が作成した『DSM 第 5 版』である (鷲見, 2018)<sup>2)</sup>。DSM 第 5 版によれば、ADHD には、忍耐の欠如や集中し続けることの困難さといった「不注意」、不適切な場面での過剰な運動活動といった「多動性」、事前に物事の見通しを立てることの困難さといった「衝動性」の 3 つの症状がみられるとされる。同基準を用いた診断では、図 1 の上欄の診断アルゴリズムで進められ、5 つの指標 (図 1 下欄) に合致すれば ADHD と認められる (齊藤, 2016)。

DSM では、第 3 版以降、「操作的診断」という方法が採用された。操作的診断とは、主観や直感をできる限り排除し、症状記述的な内容を持つ客観性の高い共通性、一致率の高い診断基準、およびその応用の明確な規定がある診断、と定義できる (池田, 2022)<sup>3)</sup>。

操作的診断の実際は、精神症状のリスト項目 (図 1 下欄のような項目) のいくつかが当てはまる

図 1 診断の手順と症状基準



\* OSADHDは「他の特定される注意欠如・多動症」を意味し、USADHDは「特定不能の注意欠如・多動症」を意味する。これらは、注意欠如・多動症に特徴的な症状が優勢であるが、注意欠如・多動症または神経発達症の診断分類におけるなんらかの障害の基準を完全には満たさない場合に適用される。そして両症状の区別は、臨床家が、その症状が注意欠如・多動症または何らかの特定の神経発達症の基準を満たさないという特定の理由を伝える選択をする場合は前者が適用され、理由を伝える選択をしない場合は後者が適用される。

①	(A) 不注意および／または (B) 多動性および衝動性の持続的な様式で、機能または発達の妨げになっているもので、(A) 不注意もしくは (B) 多動性および衝動性のそれぞれ a から h の症状のうち 6 つ（またはそれ以上）が少なくとも 6 ヶ月持続したことがあり、その程度は発達の水準に不相応で、社会的及び学業的／職業的活動に直接、悪影響を及ぼす。																				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>(A) 不注意</th> <th>(B) 多動性および衝動性</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a 学業、仕事、他の活動中にしばしば綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする</td> <td>a しばしば手足をそわそわ動かしたりトントン叩いたりする、またはイスの上でもじもじする</td> </tr> <tr> <td>b 課題または遊びの活動中に、しばしば注意を持続することが困難である</td> <td>b 席についていることが求められる場面ではしばしば席を離れる（例：教室、職場）</td> </tr> <tr> <td>c 直接話しかけられたときに、しばしば聞いていないかのように見える</td> <td>c 不適切な状況でしばしば走り回ったり高い所へ登ったりする（注：成人は落ち着かない感じに限定されるかもしれない）</td> </tr> <tr> <td>d しばしば指示に従えず、学業、用事、職場での義務をやり遂げることができない</td> <td>d 静かに遊んだり余暇活動につくことがしばしばできない</td> </tr> <tr> <td>e 課題や活動を順序立てることがしばしば困難である</td> <td>e しばしば“じっとしてられない”、またはまるで“エンジンで動かされているように”行動する</td> </tr> <tr> <td>f 精神的努力の持続を要する課題（例：宿題や報告書等）に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う</td> <td>f しばしばしゃべりすぎる</td> </tr> <tr> <td>g 課題や活動に必要なもの（例：教科書、筆記用具、鍵、書類等）をしばしばなくしてしまう</td> <td>g しばしば質問が終わる前に出し抜いて答え始めてしまう（会話で自分の番を待つことができない）</td> </tr> <tr> <td>h しばしば外的な刺激によってすぐに気が散ってしまう</td> <td>h しばしば自分の順番を待つことが困難である（例：列にならんでいるとき）</td> </tr> <tr> <td>i しばしば日々の活動（例：会合の約束、お金の支払い）で忘れっぽい</td> <td>i しばしば他人を妨害し、邪魔をする（例：会話、ゲーム）</td> </tr> </tbody> </table>	(A) 不注意	(B) 多動性および衝動性	a 学業、仕事、他の活動中にしばしば綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする	a しばしば手足をそわそわ動かしたりトントン叩いたりする、またはイスの上でもじもじする	b 課題または遊びの活動中に、しばしば注意を持続することが困難である	b 席についていることが求められる場面ではしばしば席を離れる（例：教室、職場）	c 直接話しかけられたときに、しばしば聞いていないかのように見える	c 不適切な状況でしばしば走り回ったり高い所へ登ったりする（注：成人は落ち着かない感じに限定されるかもしれない）	d しばしば指示に従えず、学業、用事、職場での義務をやり遂げることができない	d 静かに遊んだり余暇活動につくことがしばしばできない	e 課題や活動を順序立てることがしばしば困難である	e しばしば“じっとしてられない”、またはまるで“エンジンで動かされているように”行動する	f 精神的努力の持続を要する課題（例：宿題や報告書等）に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う	f しばしばしゃべりすぎる	g 課題や活動に必要なもの（例：教科書、筆記用具、鍵、書類等）をしばしばなくしてしまう	g しばしば質問が終わる前に出し抜いて答え始めてしまう（会話で自分の番を待つことができない）	h しばしば外的な刺激によってすぐに気が散ってしまう	h しばしば自分の順番を待つことが困難である（例：列にならんでいるとき）	i しばしば日々の活動（例：会合の約束、お金の支払い）で忘れっぽい	i しばしば他人を妨害し、邪魔をする（例：会話、ゲーム）
(A) 不注意	(B) 多動性および衝動性																				
a 学業、仕事、他の活動中にしばしば綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする	a しばしば手足をそわそわ動かしたりトントン叩いたりする、またはイスの上でもじもじする																				
b 課題または遊びの活動中に、しばしば注意を持続することが困難である	b 席についていることが求められる場面ではしばしば席を離れる（例：教室、職場）																				
c 直接話しかけられたときに、しばしば聞いていないかのように見える	c 不適切な状況でしばしば走り回ったり高い所へ登ったりする（注：成人は落ち着かない感じに限定されるかもしれない）																				
d しばしば指示に従えず、学業、用事、職場での義務をやり遂げることができない	d 静かに遊んだり余暇活動につくことがしばしばできない																				
e 課題や活動を順序立てることがしばしば困難である	e しばしば“じっとしてられない”、またはまるで“エンジンで動かされているように”行動する																				
f 精神的努力の持続を要する課題（例：宿題や報告書等）に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う	f しばしばしゃべりすぎる																				
g 課題や活動に必要なもの（例：教科書、筆記用具、鍵、書類等）をしばしばなくしてしまう	g しばしば質問が終わる前に出し抜いて答え始めてしまう（会話で自分の番を待つことができない）																				
h しばしば外的な刺激によってすぐに気が散ってしまう	h しばしば自分の順番を待つことが困難である（例：列にならんでいるとき）																				
i しばしば日々の活動（例：会合の約束、お金の支払い）で忘れっぽい	i しばしば他人を妨害し、邪魔をする（例：会話、ゲーム）																				
②	不注意または多動性・衝動性の症状のうちいくつかは 12 歳になる前から存在した																				
③	不注意または多動性・衝動性の症状のうちいくつかは 2 つ以上の状況（例：家族、学校、職場等）において存在する																				
④	これら症状が、社会的、学業的、または職業的機能を損なわせているまたはその質を低下させているという明確な証拠がある																				
⑤	その症状は、統合失調症、または他の精神病性障害の経過中のみに起こるものではなく、他の精神疾患（例：気分障害、不安症、パーソナリティ障害等）ではうまく説明されない																				

(出所) APA (2013) 及び斉藤 (2016) をもとに筆者作成。

かを調べ、機械的に特定の診断名に振り分ける。結果として、医師間のくい違いが少なくなるとされる。一方、こうした診断方法の帰結として、正常と異常の病理学的境界は解明されていない。ADHDの傾向性は、連続したスペクトラムと捉えられ、障害の特性がみられるものの診断基準に満たないグレーゾーンが存在し、似た症状を有するが確定診断に至らないケースもあるといわれている<sup>4)</sup>。加えて、診断におけるグレーゾーンは、ADHDの「併存障害（当該の病因と関連して出現する症状・障害）」の一つとされるうつ病の診断とも関連する。例えば、岩波（2015）は、臨床現場では、うつ病などを理由に受診した人がADHDであることが明らかになるケースが多く、うつ病が二次的に発現したと考えるべきか、両者が同時に出現したと考えるべきかの判断に迷うことが多いとする。

以上をまとめると、ADHDの主な症状は、不注意、多動性、衝動性に分類でき、症状はスペクトラムであり明確な診断の境目を見出すことは難しいことなどが確認できよう。

一方、精神医学領域の議論から離れて、ADHD起業家研究分野におけるADHDの概念化の特徴や意義についても、ここで確認しておきたい。先行研究では、主として調査対象者への性格特性に関する質問票調査結果などから、一定の基準でADHDの特性を抽出し、それを分析に用いる研究が主流であった（Antshel, 2018）。但し、そうした研究では、被験者が必ずしもADHDとして正式な医学的診断を受けた訳ではなく、その資質や傾向に注目した研究が主となっていた。比較的少数の研究として医学的診断を受けた被験者を対象とするものもあるが、それらも、質問票調査でのADHDの診断の自己申告に依拠したり（Lerner et al., 2019; Dimic and Orlov, 2014）、少数の起業家の事例を掘り下げるものである（Wiklund et al., 2016）。

後述する先行研究では、ADHDを起業家研究に導入することで生じる様々な分析上の課題や限界（診断の有無・精度・時間軸、症状のスペクトラムなど）を前提としつつ、経営学やアントレプレナーシップ論の視点から、ADHD起業家の事業化プロセスのメカニズムを探究したことがみとれる。本稿も、こうした先行研究を参考にして調査分析を試みている。

### Ⅲ 先行研究

#### 1 資質アプローチとその超克

既述のように、ADHDと起業家の関係性は以前より注目されてきた。しかしそうであっても、それは扱いの難しいテーマであり、それにもかかわらず敢えてその研究に取り組む研究者には心理へ注目するミクロな志向が強いことなどもあってか、ADHD起業家研究は、ADHDをこれまで主に個人の資質の問題として捉えてきた。そこでは、「起業家であること」にとって、ADHDという特質が肯定的、あるいは、否定的な意義を有するという2つの主張が併存していた。この節では、この双方の立場の諸研究を概観した後、両者を統合するための視点の転換が必要となることを主張する。

### (1) ADHDの肯定的な側面への注目

資質論ベースのADHD研究は、狭義の経験的な研究を中心に近年活発化し、その多くがADHDの肯定的な側面を強調する(Antshel, 2018)。例えば、ADHD傾向とアントレプレナーシップの戦略駆動力としての企業家的志向性(Entrepreneurial Orientation: EO)との関係を分析したYu *et al.*, (2021)は、多動性や衝動性はEOの表出を促し事業成果を高めるとし、逆に不注意はその限りではないとした<sup>5)</sup>。同様の結果は、Wismans *et al.* (2020)でもみられ、衝動性傾向は、EOの先駆性とリスク志向性と深く関わり、不注意傾向との関係は薄いとす。

ADHD傾向と企業家意図(Verheul *et al.*, 2015; Wiklund *et al.*, 2017; Lerner *et al.*, 2019)や自営選択(Dimic and Orlov, 2014; Verheul *et al.*, 2016)との関係についても、EOと同様に肯定的な関係を支持する研究がある。この他、企業家マインドセット、中でも環境変化などから価値創造の可能性を認識する能力としての企業家アラート(Kirzner, 1973)とADHD症状との正の関係性を示す結果が出ている(Moore *et al.*, 2021)。加えて、限定的だが日本の研究でも、ADHDはフリーランスに向く資質であり、こだわりと集中が起業と起業過程に関わる学習に適する可能性を示唆する(江島・藤野, 2019)。

### (2) ADHDの負の側面への注目

以上のように、多くの先行研究は、一見、弱点と捉えられがちなADHDが起業や事業創造プロセスで強みとなる可能性を指摘する。一方で、近年、その結果に疑問を呈する報告もみられるようになる(Canits *et al.*, 2019; Lerner *et al.*, 2018b; Wiklund *et al.*, 2016)。ADHDの症状が、創造性、突破力、集中力といったアントレプレナーシップの駆動力と強い親和性がある一方で、起業後の事業継続や発展プロセスにおいては、ルーティーン業務、準備作業、対話、組織化、熟慮、効率を要する局面など成人ADHDが苦手とするタスクにも直面するという指摘(Lerner *et al.*, 2018b)には妥当性がある。

Wiklund *et al.* (2016)は、ADHD診断を受けた起業家のケース分析を通じて、ADHDの衝動性が起業行動を突き動かし、その行為が事業の生産性を向上させ、また、その生産性の向上には、ADHDの過集中が影響し、結果として、専門性の高度化や知識獲得に効果を発揮したとした。一方、そのメカニズムは、特に不確実性が高い事業環境下で機能するとし、逆に、不確実性が低い環境下では、ある程度将来予想が可能であるにも関わらず熟考なく直感で行動する衝動性は、事業の成果を低下させる可能性があるとした。

関連して、Wiklund *et al.* (2017)は、ADHDの症状のうち、不注意より多動性が、その行動範囲や関心の広さから、衝動的な行動、つまり刺激欲求や冒険心を駆り立て、事前に十分な検討を加えることなく、新しい世界である起業へと向かわせる傾向が強いとす。一方で、不注意傾向が強いと、注意喚起が行き届きにくく、不安や焦りが強まり切迫感が増加して、安定しない起業行為への関心は薄れるとも指摘する。

さらにTucker *et al.* (2021)は、アントレプレナーシップの重要な特性の一つである事業機会の認識とADHDを構成する不注意と多動性の関係について分析し、不注意は、自己効力感との

負の関係性を通じて事業機会の認識に否定的な影響を与えるとした。そもそも事業機会の認識には、集中力、パターンを認識する意思、持続的な思考などが求められるが (Baron, 2006)、不注意は、そうした周辺や特定の現象への集中に欠ける傾向にあるとされる (Kessler *et al.*, 2005)。

起業後の発展プロセスにおいても、ADHD の症状が邪魔をし、予見可能な落とし穴に注意を払えなかったり、衝動的に貯金を使い切ったり、財産を処分したり、事業継続を危険にさらすことも少なくないとされる (Lerner *et al.*, 2018b; Lerner *et al.*, 2019)。

### (3) 分岐点

こうしてみると、ADHD が梃になり起業や事業発展プロセスに正に働く場合と、逆に邪魔をして負に働く場合が並存していることが考えられるが、何が明暗を分けるのだろうか。Lerner *et al.* (2018b) は、アントレプレナーシップの諸活動を、連動する一連のライフサイクルの7つのフェーズに分けて捉え、それぞれのプロセスの中で ADHD がいかせる局面と障壁となる局面とを見極める必要があるという。加えて、Greidanus and Liao (2021) は、ADHD と起業、事業成果、事業継続の関係について、社会環境面からの影響を考慮し、一定の外部からの介入を意味する対処要因をモデルに組み込むことの有効性が分析に基づいて主張される。彼らによれば、ADHD の症状は、治療という対処を受けた場合に起業行動を抑制するとされる。事業活動の成果については、治療を受けた場合の方が高くなるとし、事業の継続性については、治療を受けた場合に抑制されるとした。関連して興味深い点は、ADHD の二次的症狀ともいわれるうつ症状は、起業と事業持続性に負の影響を与え、事業成果については統計上有意な結果は示されなかったことである。

一方、こうした実証的な研究の分析方法の限界についても指摘しておきたい。多くの先行する分析は、質問票から得たデータから研究者が ADHD の傾向の有無や症状について解釈を加えたうえで調査対象者の資質を分析しており、ADHD の正式な診断を基礎とした分析は限定的であった<sup>6)</sup>。その結果、調査対象者の ADHD 症状の程度に幅が生まれ、起業行動プロセスへの影響にも差が生じた可能性は否定できないといえよう。こうした方法をとるのであれば、ADHD の精神医学的な診断方法にも立ち入ることが求められるかもしれない。その点、正式な病理的診断を受けた成人 ADHD の起業行動の研究は、そうした研究上の難点を回避できると考えられないだろうか。後述する本調査では、こうした点を考慮し、ADHD の診断を受けた起業家を分析対象としている。

### (4) 視点の転換

以上の先行研究レビューからは、ADHD が一連の起業行動プロセスに正の影響を与えることもあれば、負の影響を与えることもあることがわかった。また、その分岐点には、ADHD の診断や対処が関わるとされるが、その条件の探索は途に就いたばかりといえよう。加えて、こうした課題に対して、ADHD 症状の背景を観察しその原因を探るアプローチが求められるといえるが、そうした研究蓄積は限定的である。

成人 ADHD の中には、社会的に生きづらさを感じる経験をした人は多数存在するだろう。組

織、コミュニティ、社会との間での様々な摩擦、壁、制約からの影響は、その程度の差こそあれ、強いことが推察される。こうした中で、起業を選択する ADHD 起業家も存在する。どのような背景や理由で起業を選択し、その結果、何が変わったのか。また、ビジネスは軌道に乗っているのか。こうした ADHD 起業家の行動を理解するためには、単に ADHD を資質として捉えるのではなく、彼らの生き方を問う必要がある。ADHD が肯定的な因子であっても、ADHD の誰もが起業家となるわけではない。ADHD が否定的な因子であっても、起業家として生きることを選択する人もいる。結局、それぞれが自身の ADHD という特質を踏まえて、どのような生き方を選ぶかの問題といえよう。

## 2 解放アントレプレナリング

成人 ADHD は、時に、突発的な行動に出たり、特定のタスクに執拗に固執するなど、周囲からの理解が得にくい行為に及ぶことが多々あり (Lerner *et al.*, 2018a), それ組織内で摩擦を生み、結果として、離職したり、精神的に病むケースも多々ある (Lerner *et al.*, 2018b; Lerner *et al.*, 2019)。一方、そうした身体的、精神的、社会的な生きづらさから抜け出し、自分の好きなことにこだわり、自分のペースで生きるすべを見出す成人 ADHD もいる。ADHD 起業家はそれに該当し、周囲とはやや異なる自分の個性を捨てることなく、そこにこだわり、自分らしく自由に生きる術としての起業を選び、事業を展開している。彼らは、負の側面としての ADHD の資質を梃にして、生きづらさからの解放を追求するために起業という選択をしているのである。

こうした起業を通した生き方のあり方を捉える理論的枠組みとして、「解放アントレプレナリング (EE)」がある。EE は、起業プロセスを起業家の資質そのものではなく、解放という観点で捉える点にその本質がある。EE における解放とは、社会との関わりの中での個人の制約への対処の仕方のものであり、そこに資質論をこえる可能性をみることができる。

解放 (emancipation) の語源は、ラテン語の “mancipates” と “emancipare” にあり、息子や妻を制度的支配から解放することにあつたが、その後、19 世紀までに、その概念の対象は個人から社会全体へと広がり、米国リンカーン大統領の解放宣言に代表される奴隷解放運動や女性参政権運動へ結びついていったとされる。ここでの解放は、様々な制約からの自由を基本とし、自身や集団を、倫理的、政治的、文化的に解き放し自由にする行為を指すとともに、他人や他集団を制約から自由にし、幸福を導き、社会的資源を獲得する行為をも意味する (Coole, 2015; Laclau, 1996)。それは、釈放、離脱、束縛をはずすこと、とも同義とみなされ、過去および現在の抑圧された状態を前提として概念定義される。

Rindova *et al.* (2009) は、こうした思想の潮流を受け継ぎ、起業や事業創造プロセスとしてのアントレプレナーシップの動的な行為プロセスを解放概念とリンクさせ、EE として捉えた<sup>7)</sup>。彼らは、アントレプレナーシップのプロセスが、起業家自身やサービスユーザーを物理的、社会的、心理的な束縛から解き放し、自由と幸福を享受できる手段になりうる可能性を示唆した。ここでは、個人や集団が生み出す変化創造 (change creation) が軸となり、新たな経済的、社会的、

制度的、文化的な価値や環境が表出されることも想定された。

さらに彼らは、EEには「自主／自律の追求 (seeking autonomy)」「オーサリング (authoring)」「宣言 (making declaration)」の3つの要素が内包されるとする。自主／自律の追求とは、支配的な慣習や価値観などの抑制から自由を勝ち取る方法を探し活用する一連の行為をさす。経済的、社会的、技術的、文化的、制度的な制約を壊し、あるいはそこから逃れるプロセスがここでは強調される。オーサリングは、支配され影響を受ける側から支配し影響を与える側へ移動し、社会的関係性やルールを更新し再定義しながら変革を担う行為を意味する。受動的に他人が設定する目標やルールに従うのではなく、それらを自ら設定し能動的に行動し資源を更新しながら変化を生み出す。宣言とは、摩擦や変化が生まれることをいとわず、自身の行為、ニーズ、主張などを明瞭な言語や行為で表明することを意味する。利害関係者へ変化を創造する意思が伝わり、そこから必要な支援や行為につながる可能性も拓くことができるとされる。

以上からEEは、機会の発見／創造と社会の富の創造にかかわる起業家の行為やプロセスに焦点を当てた従来のアントレプレナーシップ概念を超えて、広く変化創造を促す個人や社会集団の、抑圧や制限からの解放を起点とした自由と開かれた場や社会を追求する行為プロセスに注目していることが分かる (Verduijn *et al.*, 2014)。それは、営利に関わる起業家のみならず、社会起業家、マイノリティ起業家、女性起業家、夢追い起業家など、日々の暮らしで自由を追求し変化創造活動にコミットする起業家の諸活動プロセスを包含する概念として捉えられる。また本稿の冒頭に掲げた、起業家であることと社会秩序との不適合性という論点に対しても一定の示唆を与えるものと考えられる。EEは、既存の社会秩序からの抑圧や離脱と新たな社会秩序の創造を目指す概念だからである。

こうした Rindva *et al.* (2009) が提唱したEEは、その後、ケース分析による検証、概念化や理論化ならびに実証的研究を通じて広がりを見せる。例えば、Laine and Kibler (2020) は、EEとは何からの解放かについて議論を深め、収縮的な社会的位置、社会的権威、事前に割り当てられた目的からの解放による機会と捉え、また、解放の先にあるものとして、道徳的秩序の検証、反乱、再考を一つの帰結としてみて、解放に伴う自由の行使の意味と範囲を掘り下げている。また、Pergelova *et al.* (2021) は、EE概念を用いた実証的研究から、起業家の自由を追求する動機の違いが、オーサリングのあり方や事業成果の捉え方に影響を与えることを示す。制約からの起業家個人の解放か、自身が所属する社会集団の解放かによって、自身に課される制約、自由裁量、支配の程度に差異が生じ、そのことが事業の成果認知にも影響を与えることを示唆した。

EE概念を用いた実証フィールドや文脈も広がりを見せ、Jennings *et al.* (2016) はマイノリティ起業家の行動プロセスを分析する。そこでは、そうした起業家が制約から逃れて自由や夢を追求する諸活動の実態が示される一方、連鎖的に登場する新しい制約が壁となり解放を抑制する可能性も指摘される。また、Chandra (2017) は、宗教的テロリズムのイデオロギーや過去のトラウマからの解放をEE概念から分析しようと試みる。そこでは、社会起業家やソーシャルビジネスの一連の諸活動プロセスが、制約から自由の行使への契機となり、それが個人や組織の変化創

造を促し、人生の新しい意味と社会的役割の意義を見出し、社会課題の解決に向かったと主張される。

このように EE は、様々な精神的、社会的制約からの解放プロセスの実態を理解し解明する視角として援用され、アントレプレナーシップ研究の拡張と解明にいかされている。起業や事業創造にかかわる一連の価値創造プロセスが、一定の抑圧や制約から個人や社会を解き放し、新たな価値と幸福感を導く可能性を秘めていることは、障害を伴う生きづらさからの解放プロセスをみる上でも示唆的といえるのではないだろうか。

以上のように、EE は、ADHD 起業家を資質面から捉える観点から、彼らの生き方の問題に起業行動の捉え方を置き換える点で決定的な重要性をもつ。一方で、EE の議論には、次のような注意も必要である。それは、その中核概念である解放概念はブラックボックスであり、起業家がどのように解放に至るのかは自明ではないという点である。解放とは、構造・世界・社会から完全に自由となった状態や真実の自己に到達した状態ではないからである。

Rindva *et al.* (2009) が指摘するように、解放は、自主／自律の追求、オーサリング、宣言などによって新しい秩序を創り出す活動である。しかし、解放がどのような転機で始まるのかや、抑圧から抜けて EE に取り組めるか否かの違いを生む理由は明らかでない。解放を制約からの自由と単純に捉える概念化の傾向も広くみられる。それゆえ、ADHD 起業家が生きづらさからの解放をどのように成し遂げ、また、彼らにとっての解放とは何を意味するのかを探究することは、EE の論理構成を精緻化するうえでも重要な意義をもつ。本稿では、こうした理論的視座に立脚し、ADHD と起業家の関係性を分析していく。

### 3 リサーチクエスト (RQ)

本稿の ADHD 起業家に関する調査は、ADHD という特質が一連の起業行動プロセスに正と負の両方の影響を与えることから、そのプロセスにはどのような要因が隠れているのか、また、それらがどのような影響を与え統御されていくのかを探索することを目的とする。

こうした問いにアプローチするために、我々は、先行研究を参照しながら、起業時の行動プロセスを軸に据えつつも、そこに限定することなく、その前後の事業プロセスにかかわる諸要因にも目を向け、社会的制約や負の症状を踏まえながら、ADHD と個人の生き方に踏み込み、諸現象を捉え解釈を加えることとした。その結果、探索的検討テーマとして、起業の動機や背景、起業後の事業展開と症状、事業成果への認識、診断による外部からの対処アプローチを設定し、以下の2つをリサーチクエスト (RQ) とした。

RQ1 ADHD は、起業から事業展開、事業成果へというプロセスにどのような影響を与えるのか。

RQ2 そのプロセスで、診断による外部からの対処アプローチは、ADHD 起業家にどのような影響を与えるのか。

## IV 調査

調査は13人のADHD起業家を対象とし、診断を受けたADHD起業家に共通する特徴を抽出し解釈する探索型リサーチとして実施した。本稿の目的は、ADHDの多様な病的症状が起業家活動にどのような影響を与えるかを調べるのではなく、社会との不適合性に苦しみ、ADHDという診断を受けるに至った起業家の共通の属性を探り、そのことを通して起業家の本質に迫ることである。こうした調査のための完全なサンプルを現実を得ることはほぼ不可能であるが、次善のデータ源は存在する。それが以下に説明するADHDモニターである。それに依拠すれば、ADHDという診断を受けた相当数の人々の起業活動に前後する状況を把握することができる。

具体的な調査は、大手オンライン調査会社に委託し、同社が保有する1,571人のADHDモニターを用いて進めた<sup>8)</sup>。モニターとは、同社が作成する様々なテーマに関する調査協力者のパネル／リスト及び連絡の窓口であり、ADHDモニターはADHD患者のモニターである。ADHDモニター以外の疾患パネルには、肺がんや食道がんのモニターも存在し、また、仕事パネルには、就業状況や勤務先の規模に応じたモニターもある。同社を通じて、ADHDの診断を受けたと回答した人々のうちその後の調査への協力を許諾した人や基礎的な質問に回答可能とした人へアクセス可能となった。今回は、その中から、以下に説明する手順で、起業家活動に携わる人々を抽出できた。医学的にADHDと診断を受けた起業家の集団を発見し調査することは現実的に難しく、欧米の先行研究でもそうした課題を解決することは難しいとされるが、このADHDモニターを用いることで、本稿はこの課題をある程度回避している。

我々は、調査対象者である成人ADHD起業家を特定するために、モニターから20～79歳の男女で、職業を自営業、フリーランス、社長、会社役員に絞り、31人を抽出した。次に、この31人に調査への協力を依頼し、28人から回答を得た。また、調査の主たる回答形式を自由記述方式にしていたため、無回答や「特にない」の回答者、記述内容から経営者や創業者と判断が付きにくい回答者、加えて、記述内容の意図や背景が十分には理解しづらい短い語句や文章表現でなされている回答者を分析対象者から除いた。結果として、最終的に13人を分析対象者とし、彼らの記述内容を読み取り、解釈を加え、分析にあたった。

調査は2018年10月に実施している。そこでは、本研究に関わるテーマに対して、字数制限を設けず自由に記述してもらおう方式を採用した。主な問いは、「どのような背景、理由、きっかけ、思いで、現在の事業形態（起業）を選んだか」「現在の事業形態（起業）を選んでから、ビジネスはうまくいっているか」「現在の事業形態（起業）で仕事をする中で、自分がADHDであることを意識することはあるか」「ADHDの診断を受ける前と受けた後で、仕事や生活に何か変化はあったか」であり、具体的なエピソードや当時の考えを詳細かつ具体的に記述することを依頼した。加えて、年齢や正社員経験など各種基礎事項についても質問しその回答は分析資料にまとめている。

表 1 分析対象者

	年 齢	立 地	診断年	業 種	設立年	従業員数	正社員経験
A	49	福岡	2016	飲食サービス	2011	0	1 回
B	49	埼玉	2016	医療・福祉	2012	0	1 回
C	50	埼玉	2003	電気・ガス・水道	2007	1~4	3 回
D	41	東京	2018	小売	2018	1~4	3 回
E	54	広島	2016	その他	1999	0	1 回
F	43	宮城	2017	小売	2018	0	2 回
G	72	岩手	2010	製造	1988	0	2 回
H	38	埼玉	1993	運輸	2015	10~19	4 回以上
I	33	愛知	2016	小売	2017	0	1 回
J	57	和歌山	2008	医療・福祉	2009	20 以上	4 回以上
K	38	東京	2017	その他	2018	0	2 回
L	33	東京	2017	その他	2003	0	なし
M	46	沖縄	2003	情報通信	2015	0	なし

(出所) 筆者作成。

る<sup>9)</sup>。

表 1 に分析対象者の一覧を示す。本調査では、営為の主体として起業し事業に取り組む成人 ADHD 個人の行動プロセスの実態把握を目的としているため、その分析対象者には、従業員を雇用しない自営業者やフリーランスも含めている。分析対象者が営む事業の業種は様々で、年齢も 30 代が 4 人、40 代が 5 人、50 代が 3 人、70 代が 1 人と幅が広く、その多くが過去に正社員として会社に勤務していた経験をもつ。

分析に際しては、まず本論文の 3 名の共著者のうち主として 2 名の調査者が、独立して、一つのケース毎に、調査で設定した 4 つのテーマに沿って記述内容を慎重に読み取り整理し、そこから、適宜キーワードやサブテーマを記しコーディングし、同じく別のケースの記述からのキーワードやサブテーマとの類似性や相違性を 2 つのテーマ (RQ) の枠内で調整、整理し、仮のカテゴリーを設定した。次に、その結果と解釈について調査者間での対話を通じてすり合わせ、議論が熟した段階で第一次カテゴリー化を行った。その後、先行研究にかかわる議論と RQ を参照しながら、第一次カテゴリー化と同様の方法で、まず各調査者が独立して作業を進め、その後、調査者間ですりあわせ、集約的概念化 (第二次テーマ化) を行い、さらにテーマ横断的概念化/抽象化についても同様の方法で進め、それが最終的に概ね飽和するまで、繰り返し議論し作業を実施した<sup>10)</sup>。

## V 分析結果

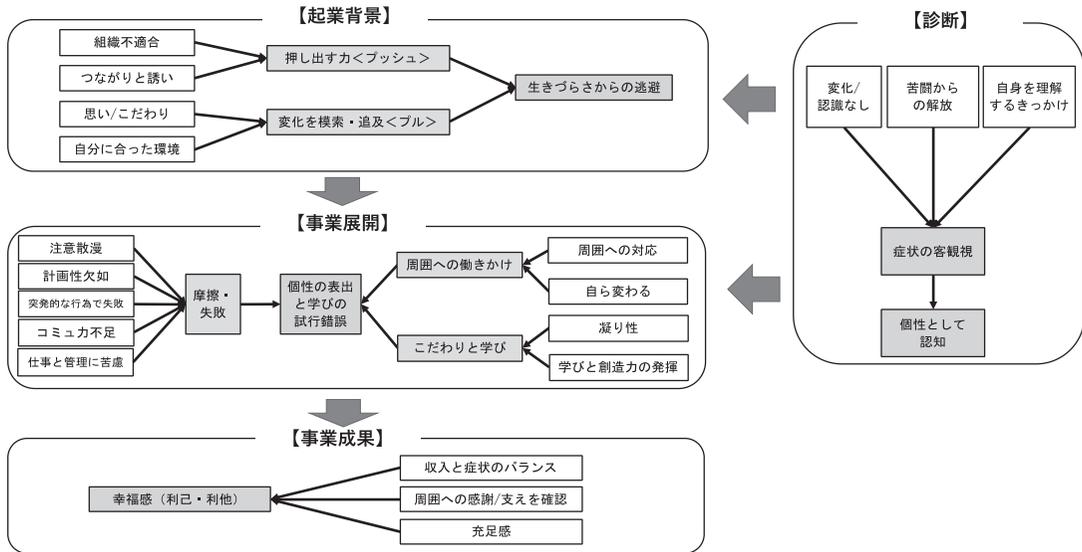
ここでは、ADHD 起業家の、起業の背景から事業成果に至るフェーズ (「起業背景」「事業展開」「事業成果」「診断」) ごとの分析結果を記述したうえで (表 2 参照)、最後に小括として全体の分析結果について述べる (図 2 参照)。

表 2 第二次テーマ／横断概念、第一次カテゴリー、引用

■ 起業背景	■ 事業展開
押し出す力（ブッシュ）／生きづらさからの逃避	摩擦／個性の表出と学びの試行錯誤
組織不適合 A：会社員で精神的に病み、会社事情で退社。一人でできる仕事をしたいと思った C：鬱病の療養後、ハローワークへ通うが、当時は三十五歳を超えた年齢では未経験での正社員の募集が、かなり少なかった E：出産がきっかけで、会社組織についていけなくなった F：仕事の大半がコミュカを要するので上手く立ち回れなかった I：みんなと同じように働けなくて周りに迷惑をかけてしまうのがイヤで1人でやることにしました K：会社員時代に精神的に疲弊し、鬱病、ADHDの診断を受け退職つながりと誘い B：友人に背中を押されて自分も起業した C：雇用給付が切れると同時に父の見習をすることにした	注意散漫 B：集中するのが続かないので最後の詰めが甘くなってしまいう E：請求書と同じミスがあったり、よく変換ミスもあり読み返しがうまくできない F：気が散り円滑にいかない H：集中して物事を考えることが苦手 計画的性欠如 K：書類提出はぎりぎりまでできない。机の上は片付かない L：物事を後回しにする特性があるので、連絡が遅くなり信用を失うことがあってはならないと常に意識する M：先延ばしが多い 突発的な行為で失敗 A：仲良くなったお客様をADHDの症状から怒らせてしまったりして縁が切れてしまうこともしばしばある E：思ったことを直ぐ口にして失敗をすることももある コミュカ不足 C：ADHDとアスペルガーと両方なので、しかもこの二つは被る症状も多いので、確たることは断定できないが、お客様との交渉となると、発声が多くなり、父のサポートを受けている D：サラリーマン時代に副業として始めた事業が軌道に乗ったため本業にしました 仕事と管理に苦慮 B：信頼した顧客に支払いの先延ばしを要請され数ヶ月待っていたらトンスラされてた働きの未収になってしまった D：販売した商品に起因する事故で、顧客に損害賠償を請求され、現在対応に追われています。販売責任の範囲等の知識が薄いため、今後は、顧問弁護士を雇う事を検討しています E：やればやるだけ成果がでる。しかし、体調をこわし納得行く動きができず仕事も減ってきた。とはいえ、動かないと仕事もないのでネットなど利用 H：会計処理に手こずることが増えた
変化を模索・追求（ブル）／生きづらさからの逃避	周囲への働きかけ／個性の表出と学びの試行錯誤
思い／こだわり B：人やモノを結びつけるのが昔から得意で起業した D：サラリーマン時代に副業として始めた事業が軌道に乗ったため、本業にしました G：木工作业がもともと好きだった。そして造船に興味をわいて木造ヨットを造ることに踏み込んだ H：個人事業主として仕事をしていたが、法人化して既存の業者と同じ土俵で仕事をしたいと思った J：以前より、人生を楽しむための施設運営を考えていたが、自分の障がいのことがあってからは、「ADHDでも結構生活できるよ」という事を他の方々にわかってもらいたいと思い起業 自分に合った環境 L：自分の特性を理解し、自分のペースで仕事を遂行 M：在宅でできる事、できる範囲でやれる（時間などの縛りがない）	周囲への対応 A：一人なので、仕事上での気は使わない H：重要な選択が必要な時は人払いをして極力落ち着くようにしている I：お客様との交渉やイベントに出店する時やネイルする時だけお客様と直接話します。褒められることが多いのでそれがすごくイヤです。なんて返せばいいかわからないです。お客様の笑顔とお金だけ頂いて自分の中で音を消す努力をしています 自ら変わる B：TO DO リストを毎日何回も見直し何とか失態・失敗の無いように努めている J：泣き言も言ってもらえないので、自分で出来ることはやる。辛抱する。考え方を変えることができるように努力する L：いろんな案件も楽しくなりました。例えば過集中をいい方向に発揮できるので、そこまで意識的にもっていく
■ 事業成果	こだわりと学び／個性の表出と学びの試行錯誤
幸福感（利己・利他）	凝り性
収入と症状のバランス A：精神的にはとても楽になった。お金の入りが無いのが辛い。マイペースでできるのできついときはあるが気を人に使わずに良い F：上手く行っているとは言いが、気楽だし食べるくらいは稼げるので満足している G：ビジネスと言う観点からしたら、成功していない。しかし、うつ病から離脱するには大きな力になった	学びと創造力の発揮 A：物凄くいろいろなことを学んでいる。ひらめき、アイデアはほとんどあり、生かしている C：前職は契約社員とはいえ、いわゆるフリーターであり、電気事業の実務が皆無であるので、第三種電気主任技術者の資格を取得したとはいえ、具体的な電気の運用等については、まだまだ未熟であるので、個人事業主となった今も実質的には父の見習であり、自信が全く無いので毎日冷や汗をかきながら従事している J：人のことを理解すると言う事や、気持ちを汲むということが苦手だったが、辛抱することを少しずつ覚えてきている。自分の枠で考えると従業員はみんなやめていくと言う事がわかってきた
周囲への感謝／支えを確認	■ 診断
I：苦労もしたと思っていないし、失敗したと思うこともないです。周りに支えられています！！助けてくれる友達のためにもイヤなことがあっても言わないようにしています。自分ルールを作って毎日自分とたかっています	症状の客観視／個性として認知
充足感 K：上司や同僚との軋轢などが無くなり、気持ちも軽くなり仕事を楽しめる L：うまくいっている	自身を理解するきっかけ E：過去の自分を理解して受け止められて楽になった。また、どうしたら自分が楽になるかも考えるようになれた I：昔から人と少し変わってると思ってたのでやっぱりかと思ったりです。仕事も人と同じようにできない、やりたくない、気持ちになっちゃうので人に雇われる形を辞めました。昔から絵を書いたり物作りが好きだったので、それを仕事にすることにしました J：人と違う自分を認めることができ、少しずつ上手に付き合っていくようになってきた L：自分の苦しいことを自覚し、対応策を考えて動くようになった
■ 診断	苦悶からの解放 A：いつも自分を責めていたが、自分がわかって楽になった B：前から他の人と何か違うとわかってた。理由も分からずモヤモヤしていたが、そうだったのかと前向きな気持ちで仕事に向かえるようになった F：謎が解けてスッキリした G：診断される前から自分で対処するようになっていたから、ああやっぱりと言う感じ K：気持ちが軽くなった
変化なし／認識なし D：そもそも病気であるという認識はなく、性質、性格の問題であると思っています。診断の結果は、参考程度に考えています H：小学生だったので、特に変わらなかった	

(出所) 筆者作成。

図 2 起業背景、事業展開、事業成果、診断の関係性



(出所) 筆者作成。

## 1 起業背景

起業背景については、分析の結果、第一次カテゴリーとして、「組織不適合」「つながりと誘い」「思い／こだわり」「自分に合った環境」の4つが抽出できた。調査対象者13名のうち11名は正社員の経験があり、転職回数も多いことから、彼らは、規律的な活動を余儀なくされる一般的な就労や組織には馴染みにくく、「精神的に病み、一人でできる仕事を探した」「仕事の大半がコミュ力に要するので上手く立ち回れなかった」などの回答が示すように、ADHDの症状が自身を苦しめていた様子が浮かび上がった。また、調査対象者のうち7名が二次症状と思われるうつ症状を発症していたこともわかった。

一方、「自分の特性を理解し、自分のペースで仕事を遂行」できる環境を探したり、「人やモノを結びつけるのが昔から得意で起業」や「造船に興味をわいて木造ヨットを造ることに踏み込んだ」など、好きなことや得意なことへのこだわりも起業の背景にあることがわかった。加えて、こうした考え方の背中を押す仲間とのつながりや彼らからの誘いも、起業への契機となっていた。

組織とのミスマッチと、それに呼応する形で背中を押してくれる仲間の存在（押し出す力〈プッシュ〉）、そして、好きなことや得意なことへコミットするという、就労マインドの変化やその模索・追求（変化を模索・追求〈プル〉）が、起業の背景要因の第二次テーマ／概念として推論できた。このことは、起業行動が、生きづらさからの逃避の起点となり、個性を発揮できるキャリアの場として捉えられたと解釈できるのではないだろうか。

## 2 事業展開

起業後の事業展開プロセスでは、第一次カテゴリーとして、「注意散漫」「計画性欠如」「突発

的な行為で失敗」「コミュ力不足」「仕事と管理に苦慮」「周囲への対応」「自ら変わる」「凝り性」「学びと創造力」の発揮の9つを抽出できた。

一般的に事業プロセスではミスはつきものだが、分析を通じて、ADHD由来の現象が日々発生していることもわかった。例えば、「集中するのが続かない」「請求書に同じミスがある」「書類提出はぎりぎりまでできない」「思ったことを直ぐ口にして失敗」などは特徴的な現象であった。

一方、「TO DO リストを毎日何回も見直し」「楽しくなってしまうえば過集中をいい方向に発揮できるので、そこまで意識的にもっていく」など自身の特性を理解しているがゆえに、周囲への配慮も忘れず、自身をコントロールし、変化を促す傾向もみられた。また、とことん「これと思ったことは頑張る」など、物事に集中し関心のあることに凝るというADHDの現象についてはみられたが、摩擦や失敗に直接つながる状況ではなかった。むしろ、「物凄くいろいろなことを学んでいる。ひらめき、アイデアはとともあり、いかせている」など学びや創造性の発揮にいかされているケースがみられた。

事業展開の中で、ADHD起業家の様々な行為には、「摩擦・失敗」「周囲への働きかけ」「こだわりと学び」という変化過程が共存している姿がみられた。これら第二次テーマ／概念は、ADHDの個性の表出とそこからの学びや制御の試行錯誤プロセスとして捉えられる。

### 3 事業成果

ADHD起業家は、事業活動の成果をどのように認識しているのだろうか。調査結果から、業績について13名中3人が、「自身の満足のいく水準を超えている」と答え、7人がそうではないとし、どちらもいえないが3人であった。一方、認識に対する記述内容を分析すると、第一次カテゴリーとして、「収入と症状緩和のバランス」「周囲への感謝／支えを確認」「充足感」の3つを抽出できた。ADHD起業家の認識では、必ずしも経済的価値への期待を強く意識するより、非経済的価値とのバランスを意識しているようであった。

例えば、「ビジネスという観点からしたら、成功していない。しかし、うつ病から離脱するには大きな力になった」「苦労もしたと思ってないし、失敗したと思うこともないです。周りに支えられています。助けてくれる友達のためにもイヤなことがあってもいわないようにしています。自分ルールを作って毎日自分とたたかっています」「上司や同僚との軋轢などがなくなり気持ち軽くなり仕事を楽しめる」など、精神的、社会的な意味を事業活動から見出していた。ADHD起業家は、自分のため、他人のために良いことを、事業成果の価値として認知し、そのことが、精神的、身体的、社会的に良い状態である幸福感に結びついているといえるのかもしれない。

### 4 診断

13名の調査対象者は、すべてADHDの診断を受けているが、その時期は異なり、起業前に診

断を受けた人が8人で、起業後は5人であった。また、診断を受けても自身の考えや行動に変化がないと認識しているのは3人で、他は診断による効果（変化）を認識していた。その認識の違いや意味を記述から読み取り分析した結果、第一次カテゴリーとして、「自身を理解するきっかけ」「苦闘からの解放」「変化なし／認識なし」の3つを抽出できた。

「いつも自分を責めていたが、自分がわかって楽になった」「そうだったのかと前向きな気持ちで仕事に向かえるようになった」「謎が解けてスッキリした」など、これまでの苦悩や苦痛からの解放感が強く意識されていた。加えて、「過去の自分を理解して受けとめられて楽になった。また、どうしたら自分が楽になるかも考えるようになれた」「自分の苦手なことを自覚し、対応策を考えて動くようになった」など過去の振り返りを通じて、自身を理解し、前を向いて歩ききっかけになったとの認識も生まれていた。

こうした変化は、ADHDの症状を客観視（第二次テーマ／概念）することを通じて、過去についての省察や個性の表出へとつながり、起業後の事業展開に関わって生じた摩擦や失敗ならびに周囲への働きかけやこだわりと学びにも影響を与えたことが推察される。

## 5 小 括

図2は、ADHD起業家の、「起業背景」「事業展開」「事業成果」「診断」の関係性を示したものである。前述のとおり、起業背景では、組織とのミスマッチに呼応する形で背中を押してくれる力と、好きなことや得意なことへコミットするという、就労マインドの変化やその変化の方向性がみられ、これが生きづらさからの逃避の起点となっていることがわかった。その後の事業展開では、引き続き摩擦・失敗が生じる中で、周囲への働きかけ、こだわりと学びという変化志向が共存し、ADHDの個性表出とそこからの学びや制御の試行錯誤がみられた。事業成果については、ADHD起業家は、他者のために良いことを、自身の事業価値として認知していると理解できた。こうした起業背景や事業展開に大きく影響を与えたのが診断であり、ADHDの症状の客観視が鍵を握っていた。

## VI 考 察

### 1 発見事実と解釈

本研究の最初の問いは「ADHDは起業、事業展開、事業成果プロセスにどのような影響を与えるのか」であった。まず起業との関係性については、ADHDの特性が自ずといかされているというより、日々の苦痛から逃れ、自由な環境を求め起業を志向していた様子が浮かび上がった。ADHDであれば起業家を輩出しやすいというわけではなく、その症状がもたらす不適合からの脱出手段として起業家となる経路があることが指摘できたといえよう。

この発見事実は、ADHD起業家が置かれた社会環境条件に影響を受け（Antshel, 2018; Lerner *et al.*, 2018b; Lerner *et al.*, 2019; Tucker *et al.*, 2021）、ADHDがダイナミックで魅力的な市場に対し

て反応する「プル」効果 (Greidanus and Liao, 2021) が顕著というより、職場での摩擦や苦闘、そして失業という状況に反応する「プッシュ」効果と相まって、起業にはそこからの逃避を促す側面があると解釈できるのかもしれない。加えて Greidanus and Liao (2021) は、ADHD にはうつ症状など二次的症狀との併存がみられ、それが起業やその後の事業展開を抑制する可能性がある」と指摘する。本研究の分析対象者である ADHD 起業家の約半数は、職場での経験などが契機となってうつ症状など二次的症狀を発症したり、また、それに類似する傾向があったとの記述もみられた。彼らが示唆するように、起業背景において、ADHD が契機となり二次的症狀が表出し分析結果に何らかの影響を与えていた可能性は否定できないといえるかもしれない。

一方、ADHD であることが起業に必ずしも無条件に適しているといい難いとはいえ、まさに ADHD であることの結果として起業家となる人々もいる。その背景には、後述する診断による効果が影響を与え、生きづらさからの解放と個性の発揮を強く認識させ、その解決策の一つとして起業を選択させたものと考えられる。すなわち、彼らは、ADHD 起業家へと自らの生を導いたといえるかもしれない。

次に、ADHD と起業後の事業展開プロセスの関係性について、本研究からわかったことは、Lerner *et al.* (2018b) が指摘するように、ADHD という属性がいかせる局面と障壁となる局面との両方が併存していたことである。前者は、その症状を制御しながら、気づきや学びを通じて苦闘から抜け出し、個性を表出しようとするプロセスであり、後者は、起業後も症状は継続し、ミスや失敗を繰り返しながら苦闘するプロセスである。このことは、起業に ADHD の資質がフィットして事業が成功した訳でもなく、ADHD の資質が事業展開プロセスで常時邪魔をしていた訳でもなく、いかせる局面と障害となる局面が並存しながら試行錯誤が繰り返されていたことを示す。これまで ADHD と起業後の事業展開プロセスとの関係性の分析は限定的であったといえるが (Antshel, 2018)、本研究は、この点について光を当て、実態解明の端緒となったといえるかもしれない。

加えて、ADHD と事業成果との関係については、総じて ADHD 起業家は、経済価値としての事業成果への認識よりも、健康、生きがい、やりがい、喜びなど、身体的、精神的、社会的に良い状態としての幸福感を望む傾向が顕著であることがわかった。さらに、ADHD の症状から顧客とトラブルが起きたり、必ずしも事業が良い状態でなくても、幸福感とのバランスを考慮し、休業や廃業する様子はみられなかった。自身の状態とのバランスを第一に、起業や事業の活動は位置付けられていたといえよう。

本研究の二つ目の問いは、「そのプロセスで診断による外部からの対処アプローチは、ADHD 起業家にどのような影響を与えるのか」であったが、診断という対処アプローチは、起業と事業展開プロセスにおいて解放を導く大きな契機になっていると推察できた。

ADHD 起業家は、自身の考えや行為が回りの人々と異なることに悩み、それが周囲との摩擦や仕事のミスへとつながり、生きづらさを感じ、うつ症状など二次的症狀を併発することもあった。しかし、診断という対処が状況を転換させる契機となっていた。診断は、これまでの自分の

特異とされる行為を自身に対して説明するとともに、状況を客観視し、過去を振り返り、省察する有効な手段になっていたと推察される。加えて、それは、ADHD 起業家が直面する様々な課題を制御したり、こだわりや過度の集中癖を学習や創造性にかす一つのきっかけになっていたと考えられないだろうか。診断による対処アプローチが、様々な制約から ADHD 起業家を解放し、自律、独立へ導き、内部に秘めた資質を発揮する環境を提供する役割を果たしていた可能性は高いといえよう。

以上の発見を EE の分析枠組みに照らすと、ADHD 起業家にとっての解放とは、無限定の自由の獲得や真実の自己への到達という状態を意味するのではなく、自己を取り巻く世界を変革する中で新しい自己を創出する実践であった。Foucault (1984) に倣えば、そうした自己創出の実践を「自己の統治の実践」と呼ぶことができる。診断が解放の転機となるのは、ADHD 起業家が自己を統治し実践する上での導きとなるからであろう。

## 2 起業家研究への学術的インプリケーション

本稿では EE を視座に、ADHD と起業家との関係を分析し、新たな洞察の導出を試みた。ここからは、ADHD 起業家にとって解放はいかに可能となり、解放が何を意味するのかが明らかとなった。すなわち、彼らにとっての解放とは自己の統治の実践であった。

こうした洞察は、ADHD 起業家の理解を深めるに留まらず、起業家に対しても有効な一般化可能な視座を提供する。それは、自己の統治の実践という観点から起業家概念を再構成することを目指すような視座である。理論の精緻化は今後の課題となるが、そうした視座から導出されるであろう、主な3つの学術的インプリケーションを整理しておく。

一つ目は、EE が ADHD の様々な資質を制御することで起業家という生き方を紡ぎだしたように、起業家であることは資質の問題である以上に、様々な資質をどのように統御するのかという生き方の観点から理解することの重要性である。ADHD の偏った認知から生じる症状は、周囲になかなか受け入れられにくいことから、摩擦が日常的になり、そこからトラウマやうつ症状など二次的の症状を併発し、生きづらさが増していくことが考えられる。しかし、この一種の制約された状態から抜け出し、苦闘しながらも、自身のスタイルで、好きな活動に集中できる環境を、起業行動を通じて ADHD 起業家は実現していたことを想起されたい。このように、自己を統御し、自らを起業家として創り上げる実践者であるとともに、それが可能となる環境の創出者として起業家を理解する可能性が示唆されるのである。このような洞察は、Schumpeter (1926) や伊藤ほか (2021) の意志の力や野心を重視するアントレプレナーシップの論考の解釈にも新たな光をあてることになろう。また、起業家の自己の統治の実践の理解には、彼らの人生を読み解く必要があり、起業家研究におけるライフストーリーや彼ら自身の語る自己の物語や自伝・伝記の分析にも、こうした洞察は理論的及び方法論的な展望を与える。

二つ目は、診断が ADHD と起業や事業展開の触媒要因となる可能性がある点である。起業家を生き方の観点から捉えるべきという上記の洞察と関連して、それは、起業家の育成メカニズム

やそのプロセスにおける自己統御とそのための技法にかかわる示唆といえる。ADHD 起業家は、診断を契機に自己のあり方を起業家という視点から捉え直し、より上手に自分を統御できるようになった。診断を契機に抑圧から解放され、ADHD の特性を梃にして自由な立場から起業や事業活動に立ち向かったのである。ADHD 起業家にとって診断が自己の生き方を統御する転機となったように、一般の起業家にとっても、自己を分析し統御する技法としての省察、メンタリング、コーチング、モデリング（見本例）などによる導きの意義は大きなものとなる可能性がある<sup>11)</sup>。ビジネススクールでの教育や出会い、ベンチャーキャピタリストやエンジェル投資家による指導、偉大な先達となる起業家との交流、宗教への帰依などは、いずれも自己統治での導きとなりうる。この洞察は、起業家教育や起業家コミュニティの研究にも一定の示唆を与えるであろう。

最後の学術的インプリケーションは、ADHD 起業家の事業の価値や帰結が幸福感と強い親和性をもったように、起業家という概念に、人生における幸福や満足の追求という意志に関わる要因を組み込める可能性がある点である。アントレプレナーシップの帰結は必ずしも事業の成功にのみあるとは限らず、自分ができることが社会に役立つことへの喜びを実感したり、社会に必要なとされている存在であることに生きがいを感じるなど、多様な価値や意味が、起業や事業創造プロセスの中で実現されていくことに意義を見出すこともある（Wiklund *et al.*, 2019; Stephan *et al.*, 2020; Ryff, 2019）。

本研究から、ADHD 起業家の事業活動の帰結の一つとして、幸福感を指摘できた点は、限定的であったこれまでの ADHD とアントレプレナーシップの関係研究（Antshel, 2018）に新たな知見を提起できたといえるかもしれない。さらに、起業家であることが生き方の問題であり自身の幸福に関係するという洞察は、経済的利得を目的としない社会的企業家の理解にも資するところがあるといえるだろう。

## Ⅶ 結 び

本研究では、ADHD と起業家の関係性を、ADHD 起業家を対象とした質的調査を通じて把握し分析を加えてきた。そこで描かれたのは、自らの人生の目的を起業家となることに見出し、自己の生を統御する起業家像であり、その背景には外部からの導きと自己の統治の実践がみられた。加えて、資質論を超越する EE の解放概念が、自己の統治の実践として解釈できる可能性も提示した。こうした解釈は起業家が異端児であることやトラブルメーカーとされることなどの既存の論点にも新たな光を当てる。起業家は、社会の既存の秩序を外れるが、不適合者に留まることなく、自己の生き方を有意義なものとする活動に向かう存在であることが示唆されるのである。

一方、本稿には多くの課題が残る。調査の分析に関しては、症状／診断状況が異なる ADHD 起業家間の比較研究は課題として残った。また、理論的考察に関しては、ADHD 起業家と一般的な起業家の比較も示唆的な考察に留まっている。自己の統治の観点からの起業家概念の精緻化

も求められる。加えて、その前提となる存在論的な議論も本稿では紙幅の関係で省略されている。本研究での発見事実とインサイトを踏まえて、今後、そうした研究課題に取り組んでいきたい。

謝辞 編集委員の新藤先生ならびに2名のレフェリーの先生方には、執筆課程で建設的で貴重なコメントを多数いただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。本研究は、科研費22K01716の支援を受けて行われました。

#### 注

- 1) 自己の統治とは、自己が自己に対する統御を意味する一方、自己が自らを道徳的主体としてつくりあげる鍛錬をFoucault (1984) は「自己の実践」とも呼ぶ。本稿では、この二つを包括する概念として「自己の統治の実践」という表現を用いる。
- 2) 診断にはDSMの他に、WHOによる基準(International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems: ICD) もよく用いられる。同基準は病院などの保険病名の定義の基準、行政機関に提出する書類の一部、また、人口動態統計としても活用されている(池田, 2022)。ICDが精神医学に組込まれたのは1975年に発表されたICD-9以降であり、1990年に発表されたICD-10はDSMと並び精神医療の実践でも一定のウェイトを占めるようになったとされる(池田, 2022)。また2018年に発表されたICD-11(日本語版は現在作業中)はDSMに準拠した診断名に変更された例が見られる。このように、直近のICDはDSMに準拠してきており、さらにDSMの方が診断の現場で用いられることが多いとされることから、本稿では、ADHDの症状、診断基準や手順をDSM第5版に従い示した。但し、診断基準は変遷し、現場ではDSMやICD以外の基準も用いられていることから、後述の本調査対象者全てがDSM第5版に基づいてADHDと診断されたかどうか定かではない点についてはご理解いただきたい。
- 3) DSMは1952年に第1版が出版され、現在の第5版に至る。その間の変遷は顕著で、客観的な操作的診断基準の導入や、人間理解を多元的に捉えようとする動きなど、特徴的な変化がみられた。詳細は、田巻ほか(2015)を参照のこと。
- 4) 尾崎ほか編(2020)によれば、どこからどこまでを病気と考えるかという局面で、医師個人の価値観が入り込むことは避けられないとされる。
- 5) 本稿で紹介・分析する先行研究のうち、その分析対象者について、ADHD傾向と表現したものは、正式な診断を受けた訳ではなく、あるいはそこは不明で、簡易調査結果に基づき判断したものである。正式な診断を受けている場合は、その旨を記載している。
- 6) 先行研究レビューの内、Lerner *et al.* (2019), Dimic and Orlov (2014), Wiklund *et al.* (2016) は、診断によりADHDと判断された調査対象を用いた研究に該当する。
- 7)アントレプレナーシップ概念について本稿では、Gartner (1985) に倣い、新事業創造(new venture creation)や自己雇用(self-employment)を軸に捉え解釈している。
- 8) 調査協力者の個人情報保護や調査結果の公開についての同意は、調査会社と調査協力者の間の規約に基づき確認できている。また調査票の始めに調査の趣旨と個人情報保護にかかわる内容が記載され、途中で回答を取りやめることも可能であり、回答者へ配慮した対応を行った。具体的

- には、調査票には次のような記載がある。「このアンケートには、要配慮個人情報を取扱う項目が含まれる場合があります。ご回答いただいた内容は、クライアントおよびプロジェクト関係者に提供され、本プロジェクトの分析にのみ利用します。この内容を基に、ご回答された方を特定しようとしたり、広告・販促を実施したりすることはありません。同意いただける場合のみ、調査にご参加ください。」加えて、分析対象とした回答者数が少なく回答者が特定されるリスクを考慮し、さらに慎重を期し、調査会社の名称も伏せることで配慮を加えることとした。なお調査会社は、約220万人の自社パネルをもつなど業界最大手で、個人情報保護方針に基づきプライバシーマークを取得し、個人情報を厳正に管理するなど、信頼と実績のある会社である。さらに本稿では『企業家研究』の編集委員会との議論を通じて、研究倫理審査への対応を行っている。
- 9) 会社の設立時期／規模／業種／事業内容／業績の満足度、就職回数、ADHD診断の時期、年齢、二次的症候など基本属性も質問したが、紙面の制約から全ての項目記載は控えた。
- 10) こうした一連作業は、質的調査の趣旨／本質や類似するテーマに関わる方法を参考に実施した (Eisenhardt and Graebner, 2007; Wiklund *et al.*, 2016; Nag *et al.*, 2007)。また、主として調査者間で取り組んだカテゴリー化や集約的概念化は、最終段階で、本研究課題に即して、総合的な観点から、共著者全体で、点検、議論し結論を導いている。
- 11) 一方で、こうしたアプローチが、逆に ADHD 起業家の行動を過度に制限し、アントレプレナーシップの本質としての新奇性、創造性、突破力など自身の個性の発揮を抑え、事業の継続や発展を抑制してしまう可能性もある (Greidanus and Liao, 2021)。社会的な関与や対処は、自己制御と個性の表出という効果において、ある意味、トレードオフあるいは逆U字の関係にあるのかもしれない。そのバランス如何によっては、規律が重視される職場で摩擦を減らし仕事に従事できるようになるかもしれないし、逆に、起業や事業創造というアントレプレナーシップの表出を遠ざけることになるかもしれない。

#### 参考文献

- 池田健 (2022) 『新・臨床家のための精神医学ガイドブック』金剛出版。
- 伊藤博之・笹井俊輔・平澤哲・山田仁一郎・横山恵子 (2021) 「パレーシアステータスとしての企業家—小倉昌男にみる企業家的心理ゲーム—」『Venture Review』第37号, 11-24頁。
- 岩波明 (2015) 『大人のADHD—もっとも身近な発達障害—』ちくま新書。
- 岩波明 (2021) 『発達障害という才能』SBクリエイティブ。
- 江島由裕・藤野義和 (2019) 「発達障害とアントレプレナーシップ」『Venture Review』第33号, 25-39頁。
- 尾崎紀夫・三村将・水野雅文・村井俊哉 (2020) 『標準精神医学 第7版』医学書院。
- 加護野忠男 (1988) 『企業パラダイムの革新』講談社。
- 斉藤万比古編 (2016) 『注意欠如・多動症ADHDの診断・診療ガイドライン』じほう。
- 鷲見聡 (2018) 「発達障害の新しい診断分類について—非専門医も知っておきたいDSM-5の要点—」『明日の臨床』第30号, 29-34頁。
- 田巻義孝・堀田千絵・加藤美朗 (2015) 「精神障害の診断と統計マニュアル (DSM) の改訂について」『関西福祉科学大学紀要』第19号, 37-58頁。

- American Psychiatric Association (APA) (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM-5®)*, American Psychiatric Pub. (高橋三郎・大野裕監訳『DSM-5® 精神疾患の診断統計マニュアル』医学書院, 2014年。)
- Antshel, K. M. (2018) "Attention deficit/hyperactivity disorder (ADHD) and entrepreneurship," *Academy of Management Perspectives*, 32(2), 243-265.
- Baron, R. A. (2006) "Opportunity recognition as pattern recognition: How entrepreneurs 'connect the dots' to identify new business opportunities," *Academy of Management Perspectives*, 20(1), 104-119.
- Berlin, L. (2017). *Troublemakers*, Simon & Schuster (牧野洋訳『トラブルメーカーズー「異端者」たちはいかにしてシリコンバレーを創ったのか?ー』ディスカバー・トゥエンティワン, 2021年。)
- Canits, I., I. Bernoster, J. Mukerjee, J. Bonnet, U. Rizzo and M. Rosique-Blasco (2019) "Attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) symptoms and academic entrepreneurial preference: Is there an association?," *Small Business Economics*, 53(2), 369-380.
- Chandra, Y. (2017) "Social entrepreneurship as emancipatory work," *Journal of Business Venturing*, 32(6), 657-673.
- Coole, D. (2015) "Emancipation as a three-dimensional process for the twenty-first century," *Hypatia*, 30(3), 530-546.
- Dimic, N. and V. Orlov (2014) "Entrepreneurial tendencies among people with ADHD," *International Review of Entrepreneurship*, 13(3), 187-204.
- Eisenhardt, K. M. and M. E. Graebner (2007) "Theory building from cases: Opportunities and challenges," *Academy of Management Journal*, 50(1), 25-32.
- Foucault, M. (1984) *L'Usage des plaisirs: Histoire de la sexualité II*, Paris, Gallimard/seuil (田村俣訳『性の歴史 II 快楽の活用』, 新潮社, 1986年。)
- Gartner, W. B. (1985) "A conceptual framework for describing the phenomenon of new venture creation," *Academy of Management Review*, 10(4), 696-706.
- Greidanus, N. S. and C. Liao (2021) "Toward a coping-dueling-fit theory of the ADHD-entrepreneurship relationship: Treatment's influence on business venturing, performance, and persistence," *Journal of Business Venturing*, 36(2), 106087. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2020.106087>.
- Jennings, J. E., P. D. Jennings and M. Sharifian (2016) "Living the dream? assessing the 'entrepreneurship as emancipation' perspective in a developed region," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 40, 81-110.
- Kessler, R. C., L. Adler, M. Ames, O. Demler, S. Faraone, E. Hiripi, M. J. Howes, R. Jin, K. Secnik, T. Spencer, T. B. Ustun and E. E. Walters (2005) "The world health organization adult ADHD Self-Report Scale (ASRS): A short screening scale for use in the general population," *Psychological Medicine*, 35(2), 245-256.
- Kirzner, I. M. (1973) *Competition and Entrepreneurship*, University of Chicago Press.

- Laclau, E. (1996) *Emancipation(s)*, Verso.
- Laine, L. and E. Kibler (2020) “The social imaginary of emancipation in entrepreneurship,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 3(4), 1-28.
- Lerner, D. A., R. A. Hunt and D. Dimov (2018a) “Action! Moving beyond the intendedly-rational logics of entrepreneurship,” *Journal of Business Venturing*, 33, 52-69.
- Lerner, D. A., R. A. Hunt and I. Verheul (2018b) “Dueling banjos: Harmony and discord between ADHD and entrepreneurship,” *Academy of Management Perspectives*, 32(2), 266-286.
- Lerner, D. A., I. Verheul and R. Thurik (2019) “Entrepreneurship and attention deficit / hyperactivity disorder: A large-scale study involving the clinical condition of ADHD,” *Small Business Economics*, 53(2), 381-392.
- Moore, C. B., N. H. McIntyre and S. E. Lanivich (2021) “ADHD-related neurodiversity and the entrepreneurial mindset,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 45(1), 64-91.
- Nag, R., K. G. Corley and D. A. Gioia (2007) “The intersection of organizational identity, knowledge and practice: Attempting strategic change via knowledge grafting,” *Academy of Management Journal*, 50(4), 821-847.
- Pergelova, A., F. Angulo-Ruiz and L. P. Dana (2021) “The entrepreneurial quest for emancipation: Trade-offs, practices and outcomes in an indigenous context,” *Journal of Business Ethics*, 1-23. <https://doi.org/10.1007/s10551-021-04894-1>
- Rindova, V., D. Barry and D. J. Ketchen Jr. (2009) “Entrepreneurship as emancipation,” *Academy of Management Review*, 34(3), 477-491.
- Ryff, C. D. (2019) “Entrepreneurship and eudaimonic well-being: Five venues for new science,” *Journal of Business Venturing*, 34(4), 646-663.
- Schumpeter, J. (1926) *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. (八木紀一郎・荒木詳二訳『経済発展の理論 (初版)』日本経済新聞出版, 2020年。)
- Stephan, U., S. M. Tavares, H. Carvalho, J. J. Ramalho, S. C. Santos and M. van Veldhoven (2020) “Self-employment and eudaimonic well-being: Energized by meaning, enabled by societal legitimacy,” *Journal of Business Venturing*, 35(6), <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2020.106047>.
- Tucker, R., L. Zuo, L. D. Marino, G. H. Lowman and A. Sleptsov (2021) “ADHD and entrepreneurship: Beyond person-entrepreneurship fit,” *Journal of Business Venturing Insights*, 15, e00219. <https://doi.org/10.1016/j.jbvi.2020.e00219>.
- Verduijn, K., P. Dey, D. Tedmanson and C. Essers (2014) “Emancipation and/or oppression?: Conceptualizing dimensions of criticality in entrepreneurship studies,” *International Journal of Entrepreneurial Behavior and Research*, 20, 98-107.
- Verheul, I., J. Block, K. Burmeister-Lamp, R. Thurik, H. Tiemeier and R. Turturea (2015) “ADHD-like behavior and entrepreneurial intentions,” *Small Business Economics*, 45(1), 85-101.
- Verheul, I., W. Rietdijk, J. Block, I. Franken, H. Larsson and R. Thurik (2016) “The association between attention-deficit / hyperactivity (ADHD) symptoms and self-employment,” *European Journal of Epidemiology*, 31(8), 1-9.

- Wiklund, J., B. Nikolaev, N. Shir, M. D. Foo and S. Bradley (2019) "Entrepreneurship and well-being: Past, present and future," *Journal of Business Venturing*, 34(4), 579-588.
- Wiklund, J., H. Patzelt and D. Dimov (2016) "Entrepreneurship and psychological disorders: How ADHD can be productively harnessed," *Journal of Business Venturing Insights*, 6, 14-20.
- Wiklund, J., W. Yu, R. Tucker and L. D. Marino (2017) "ADHD, impulsivity and entrepreneurship," *Journal of Business Venturing*, 32(6), 627-656.
- Wismans, A., R. Thurik, I. Verheul, O. Torrès and K. Kamei (2020) "Attention Deficit Hyperactivity Disorder Symptoms and Entrepreneurial Orientation: A Replication Note," *Applied Psychology*, 69(3), 1093-1112.
- Yu, W., J. Wiklund and A. Pérez-Luño (2021) "ADHD symptoms, entrepreneurial orientation (EO), and firm performance," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 45(1), 92-117.

## Abstract

---

### ADHD and Entrepreneurs

Yoshihiro Eshima, Yoshikazu Fujino, Hiroyuki Ito

While ADHD dispositions or symptoms have common tendency toward entrepreneurial behavior, they can also be a major barrier. However, the intervention of certain social involvement and coping will leverage the asset of disinhibition of ADHD and increase the likelihood of leading the emancipation and well-being through entrepreneurial behavior. Attention to ADHD entrepreneurs from emancipatory entrepreneuring (EE) perspective re-evaluates the previous conversation of the dispositional view of “who is an entrepreneur” and contributes to the elucidation of the entrepreneurial behavior process and the advancement of the research field.

---

**Keywords** ADHD, entrepreneur, emancipatory entrepreneuring (EE), well-being, practices of self-governance

---